

福本和夫稿『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』（1942）の
福本和夫の研究歴全体への位置づけと言語学・方言学等からの再検討

*A Study of a Dialect
Including Local Accents, Expressions, and Abbreviations in Hojo District,
Hoki ()*

桑本 裕二*

KUWAMOTO Yuji

和文要旨：本稿は、昭和初期の思想家福本和夫が書き残した原稿『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』（1942年記）について、福本自身の研究業績全体に対する位置づけを明らかにし、当原稿の方言資料としての価値について、正統的な言語学や方言学との関連において細部にわたって再検討したものである。当原稿は、民衆の使用方言を綿密に調べ上げたという点において、福本が研究活動末期に提唱した「日本ルネッサンス史論」と軌を一にするものであるととらえることができる。また、正統的な言語学、方言学は、1942年当時、近代的な学術分野としては緒についたばかりであり、そのなかにあって、なお専門分野の外に身を置く福本にして、実に造詣の深い考察がなされており、当原稿は、現代につながる方言資料として極めて貴重なものであると判断できる。

【キーワード】北栄町の方言、方言と文化、福本和夫、日本ルネッサンス史論

：

Including Local Accents, Expressions, and Abbreviations in Hōjō Disnp nt,

【 】

1. はじめに

福本和夫（1894-1983）は、昭和期の共産主義運動の理論的指導者であり、福本イズムの提唱者として知られる思想家である（『大辞林第四版』（2019）「福本和夫」

の項、新修北条町史編纂委員会編 2005:689f. など）。福本は、このような思想研究の一方で、農業問題や文化論に関する造詣も深く、特に共産主義運動やその思想的
研究から距離をおいて以降は、「日本ルネッサンス史論」（福本 1967）という独自の文化史論を提唱したことで知られている。

* 公立鳥取環境大学教授

本稿の考察対象は、福本自身の稿である『伯耆北條地

方ノ訛言・方言・略語考』(1942年記、鳥取県立博物館所蔵、以下「元原稿」)であり、それを活字化したものが、鳥取県北栄町教育委員会編集発行(2012)『福本和夫稿 伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』(以下「本書」)である。

元原稿は、福本の生前には活字化されることがなかったものの、福本自身の著作の中に挙がっており、その存在は知られていたものの長年所在がわからないままだった(宇田川宏「出版に当って 刊行に至る経過など」本書三ページ)。そのため、本書が発行されるまでは、元原稿の詳細な内容が知られることもなく、福本の研究活動のなかで、当著作をどのように位置づけるべきかも議論されたことはなかった。

本稿は、本書『福本和夫稿 伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』について、福本の研究活動全体に対する位置づけと、日本語学を含む言語学、方言学等からの、同時代またはその後の時代における学術的価値を検討した上で、記載内容のいくつかの特徴的な項目について、現代の言語学(日本語学)、方言学等の視点から考察を行うものである。

なお、元原稿は、縦書き、直筆、旧仮名遣いのカタカナ、旧漢字(または略字、異体字)で書かれており、本書でも直筆を活字化した上でそれらをほぼ踏襲している。本稿で本書の箇所には、縦書きを横書きにし、数字を全て漢数字から算用数字に修正、さらに、原則的に元号年を西暦年に直して示す(例:昭和十七年 1942年)。また、引用箇所は、元原稿と照合し、適宜修正している。

2. 本書の執筆から刊行まで

本書が、いつ、どこで、どのように着想され、執筆に至ったのかについては、ある程度のことわかっている。本書見返しの「福本和夫の略歴」に、[1]のように記載されている(抜粋)。

[1]

1924年 (欧米より)帰国。「マルクス主義」へ政治論文を発表。(「」はママ)
1928年6月 治安維持法違反として検挙。懲役10年の判決。
1942年4月 出獄。5月、柳田国(ママ)男を訪れる。

これによると、福本は欧米からの留学を終えてすぐに共産主義の思想家として活動し、わずか4年で検挙され獄中生活を送ることになる。その獄中生活中に、後の「日本ルネッサンス史論」の構想を練り、看守の目を盗んで、

作業用の紙風船の用紙や「収容者請願用紙」に草稿を書き付けて違法に持ち出したとされるが(高野 2015、福井 2011)、「方言についての論考はこの延長線環臚」 頼房巖や 躰 嬌躰

た。そして、北栄町教育委員会より「北栄文庫第二集」としての刊行の提案があり、元原稿所蔵の鳥取県立博物館ならびに旧蔵の福本逸子氏の承諾の下、2012年に本書発行の運びとなったのである（本書三～四ページ）。

現在（原稿提出時）、本書は、北栄町図書館より販売されている（ウェブサイト、北栄町図書館「福本和夫稿「伯耆北條地方の訛言・方言・略語考」の販売について」）。

3. 「日本ルネッサンス史論」と福本の北条方言への憧憬 3-1 「日本ルネッサンス史論」の概要

「日本ルネッサンス史論」とは、福本が発想した、民衆を中心にした学術・思想の文化的な学芸復興があったとする、独自の近代日本のとらえ方である。具体的には、寛文元年（1661年）から嘉永3年（1850年）に至る190年の時代のことであって、武士の文化に対する町人文化の台頭と抗争とによる近世的一大文化運動である（福本1967:12）。

福本の近世、近代の社会体制の歴史観の特徴は、明治維新を「不徹底ながらブルジョア革命とみなし」（内藤2016:9）ていることで、明治維新をさらにさかのぼった江戸時代の、特に上記の期間にこそ、歴史観、文化観をとらえ直すべき真髓があるとし、当時の民衆・庶民の営みに注目して論証したのである。たとえば、「儒学 国学 医学の変革へと、江戸期の「市民社会」の擡頭を反映した学術・思想革命を始期の指標としている」（高野2015:9）という見方もある。

福本の「日本ルネッサンス史論」の着想は、前述のとおり1928年から1942年におよぶ獄中生活中に、非合法に書き付け、持ち出されたものに帰する。驚くべきことに、その原稿は、福本の出獄時にはほぼ完成されていたとされる（高野2015:11）。その後、1967年に活字化されて『日本ルネッサンス史論』（福本1967）として刊行されている⁵⁾（石見2016:2f.）。

3-2 「日本ルネッサンス史論」と北条方言

「日本ルネッサンス史論」については、同名の書籍が刊行され、その内容や意義について多くのことが知られている一方、福本の北条方言への興味や洞察などについては、本書が長年未刊行であったことからして、その詳細は、本書発刊（2012年）以降を以てしても、未だほとんど明らかにされていないという現状である。そのため、「日本ルネッサンス史論」と、福本による北条方言の思索との関連性や、特に後者の論考そのものの意義や位置づけについては、推論に委ねざるをえない。

福本の考える「日本ルネッサンス」は、町人・庶民に

よる学芸復興である。町人・庶民が日常的な営みの中で学芸復興の一翼を担うという場合に、当然それを支える「ことば」は、町民・庶民の日常のことばであり、それは通常学問を行う際の漢籍の読み下しや、京、江戸等の中央語とは異なる、地域で用いられる地域方言であって、福本がそれに対して執拗なまでの意欲をもって探求しようとした⁶⁾ことは容易に想像できる。そして、福本自身にとっては郷里の母方言である「北条方言」こそが、憧憬をもって取り組んだ対象であったとみなすことができる。

後述のとおり、本書で論じられている語彙には、農耕、漁獵や村社会の習慣、家屋の構造などに関するものが多く、地域の町人・庶民の日常に根付く社会的風習などを探求しようという姿勢が窺われる。ゆえに、『日本ルネッサンス史論』と福本の本書にまとめられている北条方言研究は、本来軌を一にするものとみなしてよい⁶⁾ 福本 和夫

[6] 若シ又、専門学者ノ見解ト相違シテモ、筆者ハ筆者ノ右所説ニハ、先ヅ間違ヒハアルマイト確信スルモノデアル。(p. 150)

この福本の確信は、民俗学者柳田國男との交流に裏付けされている。第2節に記述したとおり、福本は本書の原稿を持って柳田國男に面会する予定がある旨記述されている。そして、柳田國男面会に際しては、原稿に目を通してもらった上、教示を受けるとも述べている。

[7] ナホ、近ク柳田先生ノ御教示ニヨッテ啓發サレルデアラウ諸点ハ、一々、其ノ旨ヲ明カニシテ、追ッテ、補修ヲ加ヘタイ考ヘデアル。(p. 3)

柳田國男からの直筆のコメントについては、本書ではただし書きがあるだけであるが、元原稿には、福本の原稿に赤字で直接書き入れたメモがある(写真1)。あるいは、赤字で細かく注釈されたメモ書きの断片が添付されている(写真2)。

写真1 本書p. 97にある「ミタテ」の項への柳田國男による添え書き。赤字で「見立テ、送別ナラム」とある。(鳥取県立博物館所蔵(2019年12月11日掲載許諾))



写真2 本書p. 6欄外に記載されている「スズシ」の注釈を示す柳田國男のコメントの断片(鳥取県立博物館所蔵(2019年12月11日掲載許諾))

さらに、「牧野老博士」(本書中の前後の記述より植物学者牧野富太郎(1862-1957)と推定される)に対し、元原稿を送って意見を仰いでいる。本書に以下の記述がある。

[8] ワケヲ、先日、牧野老博士ニオ話申上ゲテ、コレヲハ、方言ハデアツテモ、学者ノ閑却ヲ許サヌ事、学名ヨリモ、寧口、意味深イ内容ヲ表現シテ、ヨリ適切ニシテ且ツ詩趣ヲ持ツタ名称デアルト愚考スル所以ニ及ンダ所、ソレハ大イニ賛成ダ。カネテ自分ハ植物ノ方言ヲ蒐集シツツアルノダト、鶴髪八十一翁ノ老博士ガ、満願ニ会心ノ笑ヲ湛エテ、色々、有益ナ話ヲシテ下スツタ。(pp. 2-3)

このように、福本は、柳田國男、牧野富太郎らの専門家の意見を仰ぎ、そればかりか、これらの専門家からかなり肯定的な見解を得ていることで、「遺憾ナガラ筆者ハ、植物学ヲ学ンダモノデモナケレバ、マタ、言語學ニ何等造詣ヲ有スルモノデモナイ」(p. 3)としながらも、ある種の自信をもって本書の執筆を成したと考えられるのである。

4 - 2 これまでの他者による本書の評価

小島(2005)の巻末に「福本和夫研究文献目録」(小島2005:i-xiii)があり、年代順の福本和夫研究の文献のリストおよび『福本和夫研究』(小島私家版)、『福本和夫先生追悼文集』(『日本ルネッサンス研究所会報』1号)の目次の項目が掲載されている。同箇所記載の文献の論文題目、書名から判断するに、福本の方言研究に特化した研究文献らしきものは皆無である。そもそも、注6)のとおり、福本自身の方言に関する記述のある文献は福本(2011)が唯一で、しかも方言(しかも郷里の北条方言)に限定するとわずかに2ページに満たないのであるから、福本の方言研究に関する研究がこれまでほとんど行われなかったのも、当然であるといえる。

福井(2011)は、元原稿の発見を機に各方面からの支援、協力を賜り刊行を期するという主旨の「福本和夫『伯耆北條地方、訛言・方言・略語考』刊行趣意書」を紹介している。本書の刊行は、当年(2011年)『福本和夫著作集』完結を受けて、次の福本和夫研究の展開を図ったものと位置づけられる。しかし、残念ながら、柳田國男の直筆のメモ(写真1、2に代表されるメモ)を1例のみ引用しただけで、細部の内容に関する評価などには触れられていない。

内藤(2016)は、福本の、出身地、鳥取県下北條村(現

北栄町)への愛着に触れて、出獄後に本書(元原稿)を現地でまとめたという記述に関して注を引き、「原稿のまま残っていて活字化されていなかったが、平成二十四年(2012年)に北栄町の図書館と教育委員会で編集し「北栄歴史文庫」として立派な本となっている。民俗学・言語学からみて貴重な資料である。」(内藤 2016:9)と述べている。しかしながら、内藤(2016)も、「貴重である」とは述べながら、その詳細については何も言及がない。

以上のように、本書は、原稿のままなのが偶然発見され、様々な経緯を経て、活字化されて刊行された、という以上の、本質的な評価を今まで受けたことがなく、現在に至っているというのが実際なのである。

筆者は、この点に注目し、本書の実質的な価値について検討したい。

5. 近代言語学・方言学研究に対する本書の意義

5-1 近代言語学・方言学の発展と本書の位置づけ

明治以降、現在につながる西洋的な近代学術のうち、言語学(日本語学も含む)に関するものの発展の歴史の中で、本書はどのような位置にあるのかを考えてみたい。

近代の言語学の端緒は、1894年に東京帝国大学文化大学に博言学⁸講座ができ、上田萬年(1867-1937)が同講座教授に就任したことにある(ウェブサイト、ウィキペディア「上田萬年」)。上田は、最初期の日本の言語学を牽引し、1926年、音聲學協會(現日本音声学会)創立時に、その初代会長となる。上田の弟子筋には新村出(第2代音聲學協會会長、初代言語学会会長)、橋本進吉(初代国語学会(現日本語学会)会長)、金田一京助(第2代日本言語学会会長)といった錚々たる研究者があり、その後の言語学、国語学の発展を支えて、現在に至っている。

以上、上田萬年の東京帝国大学博言学講座就任以降、現在につながる主要な関連学会の成立を年次を追ってまとめるとおよそ[9]のようになる。

[9] 近代言語学の発展の系譜と福本稿執筆の時期

1894年 東京帝国大学博言学講座設立。初代教授、上田萬年。

1926年 音聲學協會(現日本音声学会)創立。初代会長、上田萬年。

(1928年 福本獄中生活始まる。)

1938年 日本言語学会設立。初代会長、新村出。

(1942年 福本出獄。帰郷。元原稿まとめる。)

1944年 国語学会(現日本語学会)結成。初代会長、橋本進吉。

ウェブサイト、日本言語学会「学会の基本方針・沿革」、日本語学会「学会概要・沿革」、日本音声学会「沿革」、ウィキペディア「上田萬年」を参照。

つまり、近代言語学の研究は、明治時代中期に東京帝国大学で始まり、その後30~40年を経て、昭和時代初期に学会が次々にできて確立期を迎えたといえる。一方、本書(元原稿)は、福本の獄中の1928年からの14年間を経て、1942年の出獄後の鳥取県下北條への帰省時に概ねまとめられたので、近代言語学の確立途上の時期に書かれたという位置づけになる。

5-2 方言研究史と本書の関連

方言研究、または単に、中央語と異なる地域の言語使用に対する関心がいつごろ始まったかを特定するのは非常に難しい。徳川(1977:329)は、有史以前から関心を持たれていたと推定している。

江戸時代頃には、好事家による方言収集が行われ、学問研究の域には達しないながらも、多くの方言集が編まれた(井上 1993:23)。

方言研究が学問的に扱われ始めたのは、明治以降であるとされる(徳川 1977:332)。つまり、前節で述べた、近代の西洋化の中で発展した言語学の学術研究とともに方言の学術研究が確立したとみなしてよい。前節で示したように、昭和初期以降、言語学諸分野の学会が勃興し、その流れの中で、方言研究が量的、質的に充実するのは戦後(1945年以降)であって、さらに専門分野が細分されながら、現在の学術的發展に至っている。

福本による本書の執筆は、方言研究史のなかでは、充実期を迎えるわずかばかり前の時期に行われていることになる。ゆえに、福本が本書に記した豊富なデータと論考は、近代の方言研究史の中でも極めて貴重なものであるとみなしてよい。

方言は、純粹に学術的な見地からは、その価値に優劣をつけるべきではないが、社会言語学的にみると、特に標準語や中央語(明治維新以前は主に京都、それ以降は東京を中心とした地域のことば)との対照において、価値の優劣が意識され、地域方言に対する主流となる価値観は、時代とともに変遷してきた。図1は、井上(1993)が示した、方言の価値に関する3類型とその時代的交代を図示したものである。

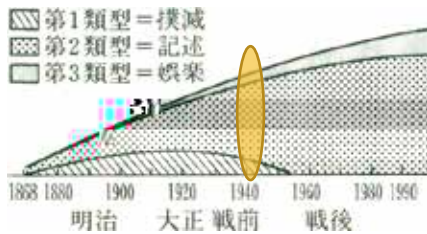


図1 方言の価値の3種類の時代的交代(井上 1993: 21より転載、●は本書の執筆時期)

第1類型の「撲滅」とは、地域方言を邪道なもののみならず、撲滅の対象とみなす考え方である。すなわち、標準語または中央語こそが正統的な言語使用であり、地域方言は撲滅すべきだという思想である。図1が示すように1960年頃にその考え方はなくなるが、地方出身者が、大学進学や就職(特に集団就職)によって大都市へ大量に移動する時期に、自らの地域方言の語彙や音韻的特徴(いわゆる訛り)に劣等感を感じてしまうという傾向は、図1が示すよりもさらに後の時代(おそらくは少なくとも1980年代)まで続いたものと思われる。

第2類型の「記述」は、地域方言と標準語・中央語の価値観の差が意識されず、特に学問的に、客観的に記述の対象となる時期である。この思想は、実は江戸時代の好事家による方言収集にはじまり、連綿と現在まで続く傾向である。

第3類型の「娯楽」は、特に井上(1993)の前後の時期に、娯楽の対象として大きな勢力を持つようになったもので、例えば、歌謡界における方言ラップの流行⁹⁾、地域方言を前面に出したテレビタレントや漫才師の台頭、特定の地域方言の使用が大きなモチーフとなったテレビドラマや映画の普及などととも、方言使用を楽しんだり、または、方言使用が何らかの利点ととらえられる場が、恐らく1990年代なかばごろに一時的に増え、その後も絶えることなく流行している。井上(1993:25)は、方言の書かれた暖簾やタオル、Tシャツや手提げかばんなどの「方言みやげ(方言グッズ)」の存在も大きいと指摘している。

このような、「撲滅 記述 娯楽」と移行してきた方言の社会的価値観のなかで、福本の本書(元原稿)の書かれた時期(1942年)を、図1に重ねれば、楕円の部分になる。第1類型「撲滅」が、依然残存しており、上記のような華やかな流行をみせる第3類型「娯楽」はまだ頭角を現さない。「方言は正統的でない言語使用である」という意識が依然として高い時代に、柳田國男、牧野富太郎らの専門家の意見を仰ぎつつも、執筆に至ったというのは、必ずしも専門的な背景知識がなかった福本の執

筆であるだけに、極めて貴重かつ斬新な資料であると断定できる。

5 - 3 柳田國男の方言研究について

第2節、4 - 2節で述べたように、福本は、本書執筆に際しては、柳田國男との交流を通して、内容を吟味してもらふことなどにより、記述内容の品質を保証しようという向きが感じられる。

柳田國男は1927年に「蝸牛考」を発表した(初出は『人類学雑誌』第42巻第4号~7号、書籍としては1930年、刀根書院刊(柳田 1930) 現在、岩波文庫で入手可能(1980年))。柳田(1930)は、蝸牛(かたつむり)の名称が、近畿の「デデムシ」を最も新しい語形としてここを中心とし、「デデムシ<マイマイ<カタツムリ<ツブリ<ナメクジ」の順で、同心円状に並んでいることを突きとめ、「方言圏論」を提唱した。柳田(1930)の「方言圏論」は、ヨーロッパ(フランス)における Gillieron, Jules (1902-1912) (フランス言語地図)に端を発する方言地理学を受け継いだもので(徳川 1977:362、イヴィッチ 1974:55) 昭和時代初期における方言研究の中心であったと目される(徳川 1977:333f.)。

福本の手による本書は、その記述の多くは動植物の名前に当てられているように、柳田(1930)に負うところが大きい。柳田國男の研究は、民俗学を基調としており、徳川(1977:334)は、1930年頃から始まった、正統的な方言研究(方言区画論やアクセント研究など)の勃興とは、必ずしも関係なかったものと結論づけている。したがって、本書の言語学的、もしくは、方言学的な信憑性については、柳田自身が、正統的な言語学、方言学から距離を置かれていると後の研究史がみなしていることから察して、如何ほどか慎重に解釈しなければならない。

6 . 本書の構成と用語の使用に関する注意点

6 - 1 本書の構成について

本書は、鳥取県立博物館所蔵の元原稿『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』の本編および追補(其ノ一~其ノ十)の全編であるが、鳥取県立博物館の所蔵原稿としてさらに幾編かの関連資料もあり、本書はそれらもまとめて活字化されている。本書の目次をみると[10]のようになっている。本編・追補およびそれ以外の項目の全ては、鳥取県立博物館が所蔵する、方言関連の文献資料である¹⁰⁾。また、鳥取県立博物館所蔵の福本関連原稿のほぼすべてが本書に掲載されていることになる¹¹⁾。[10]には、本編および追補の総ページ数と、その他の資料に

割り当てられたページ数を付すが、「伯耆北條地方の俚言採集」(18ページ)「伯耆北條地方ノ動物方言」(6ページ)「伯耆北條地方ト牛」(9ページ)を除いては、3ページ以内で、これらは原稿の断片の寄せ集めである。

[10]

- ・(本編には識別できるサブタイトルはない)
- ・追補其ノ一、二、三、四、五、六、七、八、九、十
(計148ページ)

(追加)

- ・略語法の數例(獄中作) タヅ・ワカサ・ヤゴ・ナシ
(1/2ページ)
- ・ハデ・ハセ・ハサキの語源(2ページ)
- ・伯耆北條地方の俚言採集(18ページ)
- ・附録三篇
 - 一、目高雜考(2ページ)
 - 二、伯耆北條地方ノ動物方言(6ページ)
 - 三、伯耆北條地方ト牛(9ページ)
- (附録・追加)十七年ぶりの伯耆北條地方(3ページ)
北條地方の植物風景(2ページ)
鳥取伯耆の北條地方略図(1ページ)

本編と追補は合わせて148ページであるが、それぞれの原稿に付された日付および本書に割り当てられたページ数、また、「ハシガキ」から読み取れるそれぞれの巻(そ

れぞれは紐で丁寧に和綴りにされている)の主な内容は、表1のとおりとなっている。

後述するが、福本自身が原稿に記載していた、掲載語彙の語種は、農耕や漁獵に関したものが多く、また、幼児語など、地域住民の日常生活に基づくものが多いことがわかる。このことから、一般庶民の文化の探求を模索していたことが知られ、後の「日本ルネッサンス史論」へつながる思索の萌芽が感じられる。

6-2 「訛言」・「方言」・「略語」と「俚言」

本書(元原稿)の書名にある、「訛言」「方言」「略語」について、論述の目的や内容と、言語学的な立場から、その用語使用について再考察してみる。

「訛言」というのは、『広辞苑第七版』(2018年、岩波書店)には、

[11]『広辞苑第七版』「訛言」の項

なまった言葉。標準語と音韻上相違のある語。訛語。
(略)

とある。現在の言語学研究の場では、使用されることはほとんどない。福本は、5-2で述べた、井上(1993)の示した方言の価値の第1類型「撲滅」が幅広く通用していた時期に、やや自嘲もこめて、自身の郷里の言葉を「訛った」ことばとして扱ったのであろう。

表1 本書の本編・追補の概要

	日付(1942年の月日)	ページ数	主な内容
本編	記載なし	27	「動詞」「名詞並二代名詞」「其ノ他ノ品詞の項」に加え、「「百姓スル」其他」「ペーペーの子其他」など、個々の語に対する記述
追補其ノ一	6.14	17	現地での聞き取りを基に約200語を整理
追補其ノ二	6.20	7	
追補其ノ三	6.24	4	
追補其ノ四	7.1	14	農耕関係、漁獵関係の方言、牛の方言
追補其ノ五	7.6 7.8追記	12	主として幼児語
追補其ノ六	7.15 7.31増補	13	いくつかの語源に関して言及あり
追補其ノ七	7.30	13	
追補其ノ八	8.10	7	
追補其ノ九	8.18	9	婚姻に関する方言
追補其ノ十	8.26	4	

福本は「方言」という語に関して、「訛言・方言・略語」のように「訛言」や「略語」と同等の語彙とみなしている。方言とは、ある地域で話されている、中央語または標準語と異なる音韻的、語形的、文法的実態の全てを包括した意味で使用される。同じく『広辞苑第七版』の「方言」の項をみると、[12]のように記載されている。

[12]『広辞苑第七版』「方言」の項

(dialect)

ア 一つの言語において、使用される地域の違いが生み出す音韻・語彙・文法的な相違。また、そのような相違に基づく同一言語の下位区分。地理的方言。

イ 共通語に対して、ある地方だけで使用される語。俚言。

ウ (略)

(略)

言語学研究の場では、上記 アの意味として「方言」が使われる。福本は「訛言」が音韻的な実態であるとした上で、「方言」という用語を上記 イの意味で使っているようである。すなわち、「方言」とは、語彙として中央語または標準語と異なるものを指す用語とみなしている。

本書の題名で最も特徴的なのは、「訛言」「方言」と、「略語」が対等に列挙されていることである。通常解釈では、「略語」は「方言」とは同じではない。7-6節で詳述するが、福本は北条方言に標準語にはない略語法が多くみられ、それらが当該方言の代表的な特徴であると見抜いていたのであろう。確かに、方言的な音韻の省略は各地にみられるが、福本は本書執筆にあたり、そのことに自ずと気づいていたらしいというのは、まさしく慧眼である。

題名にはないものの、本書には「俚言」という用語が多く使われている。そのうち、本編、追補以外の原稿として「伯耆北条地方の俚言採集」という原稿があるが([10]参照)。その箇所をみると、地域独特のまじいや駄洒落を含んだ格言、諺のようなものが集められている。福本は、このようなフレーズをもって「俚言」としているようである。なお、『広辞苑第七版』には、

[13]『広辞苑第七版』「俚言」の項

俗間のさとびたことば。

共通語とは異なる、その地方特有のことば。土地のなまりことば。俚語。 雅言

とあり、福本は の意味で「俚言」を用いているようである。時代の風潮のせいもあるが、「訛言」を用いたのと同じく、地域方言をやや蔑視した思想が垣間見える。

の指し示す意味は現行の「方言」とほぼ同じ意味での使用である。なお、現在、学問上は「俚言」という用語は通常用いない。

7. 本書における示唆に富んだ指摘

7-1 はじめに

本書の記述を全体的に精読してみると、言語学、方言学等に関して専門外の立場での論考、また、論文や書物としての体裁をとっていない原稿の寄せ集めであるにもかかわらず、多くの示唆に富む指摘がなされている。

第1には、農耕・漁獵関連、または村社会の構造や家屋に関する名称の語彙が多数掲載されていることである。これは、「日本ルネッサンス史論」とも深い関わりを持った、福本の関心、熱意の表れであろう。農耕・漁獵、村社会などに関する語については、7-2節で論じる。

第2に、幼児語、諺・格言(福本は「俚言」と言っている)などへの注目である。幼児語は、方言形が残存し、他方言との差異が激しく、多様な分布を見せる、方言学の分析上、非常に有益な語彙群といえる。また、諺、または戒めや諧謔を含んだ格言などの言い回しを多く紹介している。このような語種、または文は、言語学的な注目はあまりされないのが通常であり、むしろ、民俗学者として名を馳せていた柳田國男の影響を受けていたことを色濃く映し出している。この点に関しては7-3節で述べる。

第3に、「～する」という語形への指摘である。元原稿が書かれた1940年代には、問題ありとする見方があった表現に関して、方言形として残っていることを指摘している。これについては7-4節で述べる。

第4に、語源をめぐる深遠な言及があり、特に「ホイタ」の語源をめぐる詳述に触れて、福本の語源探求とそれに対する真摯な研究態度について7-5節で述べる。

第5に、略語の例示と注目である。福本は本書の題目の中に、「訛言」「方言」とならべて「略語」を列挙させている。北条方言に言及する上で、代表的な項目ととらえているのである。福本が北条方言の特徴として必須の語種として想起した略語について取り上げ、その分析について、7-6節で述べる。

また、略語に関連して、いくつかの音添加の例を挙げている。音を略すことが北条方言の一つの特徴であるとするならば、音添加はむしろ、これに逆行した傾向であるはずであるが、そのような例にも触れている箇所があ

る。これについて、7 - 7節で述べる。

さらに、福本が「訛言」としている、本書中の、音韻削除、音韻添加以外の音韻交替に関する記述について7 - 8節でまとめる。

7 - 2 農耕・漁獵、村社会などに関する語について はじめに

本書に収められた語彙、およびいくつかの特定の語に関して考察された言及のうち、農耕・漁獵など、北条地域に生活する人々の営み、また、生活や村社会の構成、家屋の部位の名称などに関するものが非常に多い。このことから、福本の、地域住民の生活の実態を深く知ろうという精神が感じられるとともに、民衆の日常からの文化的革命である「日本ルネッサンス」の着想とも大きく関わりをもっているものと判断される。

農耕に関する語彙について

「追補其ノ四 ハシガキ」に、「本篇二八、農耕関係、漁獵関係ノ方言ヲ多く収録シタ。」とあるとおり、同稿に集中的に関連語彙が掲載されている。農耕関係では、「一、名詞」の項に「農業関係ノ名詞」という下位項目があり、21項目の語彙を挙げている。その他、本編、追補のほぼ全編にわたり、雑多に収集した語彙の中にも農耕関係の名詞、動詞、略語などが散見される。[14]にそのうちのいくつかを挙げる。

[14] 農耕関係の語彙（「追補其ノ四」より抜粋）

水アテ、…… 田ニ水ヲ灌溉スルコト、動詞「水ヲアテル、」参照
リュウコシ…… 灌溉用ノ水車、按ズルニ龍骨車ノ訛ツタ略語
ドウギ…… 大川ノ大堰、小川ノ小サイ堰八單ニセキト呼ブ。

また、本編に「バーベノ子其他」という項、原稿はないながら「追補其ノ一」「其ノ三」「其ノ四」「其ノ五」「其ノ六」に牛に関する項があつて、その内容を執筆する、あるいは調査の準備をしていた形跡がある。なお、別稿で、「伯耆北條地方ト牛」という原稿があるが（本書、pp. 179-187）、追補で欠けている記述をまとめ直したものととも考えられる。その分量は、元原稿で、400字詰め原稿用紙半分に切りそろえた用紙で23枚分（罫、マスの入らない用紙もあり）にも及んでいる。そして、牛に関する方言語彙を多く集めた理由として、伯耆地方が農耕用の家畜として馬をほとんど使わず、牛を使う地域であ

ることを挙げている¹²⁾¹³⁾。「伯耆北條地方ト牛」稿に収められているのは、68項目の、牡牛、牝牛、子牛などの牛の種類、牛につける器具（馬における馬具に相当）、かけ声、俚言（格言、諺）などが詳しく列挙されている。当該地域で、役馬ではなく役牛が専ら用いられることについて、「マヤ」「マグサ」について、それぞれ「牛部屋」「牛ノカヒバ」としてあり（本書 p. 6）、本来は「馬（ま）」のためのものだったことを示唆している。別の項目では、このような記述もある。

[15] 本書 pp. 65-66 : 「マヤゴエ」の項

マヤゴエ……牛小屋ノ糞ヤ敷糞ヲ醜酵サセタ堆肥ダガ、ソレヲ馬屋肥エトイッテ井ル。

つまり、日本の広範な地域では、馬を農耕に使うのが通常であつて、牛はあまり使われない。しかし、当地（幅広く、鳥取県全域）では牛を農耕に使うのが一般であり、その分、牛に関する、特に農耕に関しての語彙が実に多様である。そのため、本来は馬に対して用いられるはずの「マヤ」「マグサ」という語は、「馬」を指す音形の部分「マ」を残した上で、牛のための語彙として用いられるということまで起こっている。

漁獵に関する語彙について

漁獵に関する語彙は、「追補其ノ四 一、名詞」の項に「 =

[17] 村社会に関する語彙

- ネガヒダシ…… 訴エ出ルコト（オカミニ）
 モヤ…… 村中、共同デ作業シタ後ナドニ、共同ノ費用カラ支出シテ、共同ニ酒食スルコトニテ、酒飲ミノ好ム所ナリ。按ズルニ、モヤヒノ略ニテ、モヤヒトハ、持ち合ヒノ略力。モトハ、費用ヲ持ち合ツテ（出シ合ツテ）酒食スルノ謂ナラム。（以上、本書「追補其ノ一」pp. 33-34）
 カシラマハシ…… 村ノオモダツタ人々。マハシトハ、引キマハストイフヤウナ意味カラツケタモノカ。（本書「追補其ノ二」p. 51）

村社会の風習に関しては「追補其ノ二」に次のような語がある。

[18] 村社会の風習に関する語彙（「追補其ノ二」pp. 50-51）

- ニッサン、…… 村デ日参ノ旗ヲ順繰リニマハシテ、マハツテ來タ家ガソノ旗ヲ持ツテ、村ノオミヤニオ参リスルコト。同ジ人ガ毎日オ参リスルノ謂ニアラズ
 センド、…… 病人ノタメニ、村ノモノガオ宮ニアツマリ、アツマツタ人々ガ、スベテデ併セテ、千度礼拝祈願スルコト。ソノ度数ヲ数ヘルノニ、ピーピノ葉ヲ用ヒル。動詞デハ、千度ヲ踏ムトイフ。
 マンニンコ、…… 万人講ノ義乎。貧窮者ガ病氣ナドデ特ニ困ツタ際ニ、村ノ人々ガ二人宛一組ニナツテ、近傍ノ村々ヲ物モラヒニ歩ヒテ、米麦乃至金銭ヲ集メテヤルコト。

これらの語彙群は、方言というよりも、当該地域の社会的習慣を知るための語彙であるといえよう。

さらに、「追補其ノ九」に「婚姻ニ関スル方言並ニナゴヤ歌」という項があり、全部で13項目を挙げている。

[19] 「婚姻ニ関スル方言並ニナゴヤ歌」（「追補其ノ九」pp. 140-142、以下抜粋）

- サンヤ帽子…… 角カクシ
 ニイソク…… 人足（ニンソク）ノ訛。嫁入道具ナドヲ荷ツテ行クタメニ臨時雇ハレタ人、

- ナゴヤ…… 嫁入りノ際、ニイソクノ中ニ、特ニ、歌ノ上手ナモノヲ、タノンデ、歌ハセル嫁入歌ニシテ、家ヲ出発スル時ノ歌ニ首、道中ノ歌一首、先方ノ村ニ入ツタ時ノ歌一首、先方ノ門前・門内ニテ歌フウタニ首、先方ノ家ニアガル時ノ歌三首カラ成ツテ井ル。但シ、道中デノ歌ハ、正規ノ一首ノ外、勝手ニ、他ノ歌ヲサシバサンデ歌フコトモアルト云フ。

また、弔事の語彙としては、以下のものがある。

[20] 弔事の語彙

- シンモ…… 死喪（按ズルニシニモノ訛リ）¹⁴⁾（本書「追補其ノ五」p. 86）
 ミタテ…… 葬式、按ズルニ、御立チノナマリカ¹⁵⁾。（本書「追補其ノ六」p. 97）
 ソウニ出ル（^{スハ}ニ行ク）…… 死去ノ知ラセニ行ク（本書「追補其ノ七」p. 117）

家屋の構造に関する語彙

「追補其ノ一」のなかに、家屋の構造、間取りに関する語彙が豊富に挙げられている。

本書 p. 36以降3ページにわたって「二ハ」「オモテ」「ゲンカ」など、現在はほとんど使用されない家屋の間取りの語彙が挙げられている。そのいくつかを [21] に挙げる。

[21] 家屋の構造、間取りに関する語彙（本書「追補其ノ一」pp. 36-37）

- 二ハ、…… 家ノ建物ノ中ノ土間（動詞「二ハスル」ノ項参照ノコト）
 オモテ、…… 玄関ニツヅク表側ノ奥ノ間ニテ、トコノアル間ナリ、
 ゲンカ…… 玄関ノ略語、玄関乃至玄関ノアル間
 ザシキ…… 玄関ノウラニアタル間
 ヘヤ…… オモテノウラニアタル間
 ナカノ間…… 三マ造ノ家屋ニオイテ、玄関トオモテトノ中間ニアル間、及ビ、ザシキトヘヤノ中間ニアル間ヲ中ノマト呼ブ。而シテ多クハ前者ノ中ノ間ニ仏壇ヲオク。

まとめ

本7 - 2節で挙げた語彙群は、方言というよりは、そ

の時代の農村文化（または漁村文化）を反映したものであり、当時の言語構造を明らかにしようとしたというよりは、当時の（記述時は現在の）農村社会の構造を明らかにしたものと位置づけられるのではないだろうか。

つまり、これらの語彙群およびそれらに関する論考は、言語学的というよりは、文化人類学的に価値あるものであると結論できる。

7 - 3 幼児語、諺・格言などについて

幼児語など

幼児語は、幼児の発話ではなく、幼児に対して周囲の大人が使う語や、呼びかけである。通常幼児語は、音韻的にも意味的にも、方言の特有性が色濃く反映される。

本書「追補其ノ五 ハシガキ」に「主トシテ、小兒語ヲ採取シタ」(p. 81)とあり、「五、北條地方ノ小兒語其他」という項がある。ここには76項目の幼児語または関連の語彙が挙げられている。

[22] 幼児語など(本書「追補其ノ五 五、北條地方ノ小兒語其他」pp. 87-92)

ママ.....	御飯
ベロベロ.....	飴・ギヨウセン、
トント.....	布團
ベベ.....	着物
ブーアー.....	魚
ボチャ.....	風呂
モーモーセー.....	大便ヲフイテヤル時ニ、適当ナ姿勢ヲトラセルタメノ言葉
タツタセー.....	立テヨ
オツチンセー.....	坐レヨ

これらの幼児語のほとんどは現在（論文提出時、2019年）では使われなくなってしまった語形である。このような形で本書に記録があることは極めて貴重である。

さらに、後述の「伯耆地方の俚言採集」のなかに、次のような言い回しがまとめられている。

[23] 子守唄(本書 p. 155)

・ネンネンヤ、オロロンヤ、寝タ子ニヤ、バボツイテヤリマセウ。(子守唄)(註、バボ八餅ノ小兒語、ネンネ八寝ノ小兒語)

[24] 子供ガ人ヲカラカツテ言フ言葉(本書 p. 158)

・頭十貫尻五貫、ヤーイ！！(一寸法師ノヤウニ、頭ガ馬廐ニデツカクテ、尻ガ小サイト言フ意味)

[25] カクレンボノ唄(本書 p. 161)

・ヨウニ、ヨウニ、カクレシコ、アトカラ、子猫ガサーガスゾ。(註、カクレンボヲカクレンコト云フ)

これらの言い回しについては、音声の記録があれば、当該地域方言の音韻の研究に極めて貴重な資料となりうるが、音声記録でないことは非常に残念である。

諺・格言

福本は、諺、または戒めや諧謔を含んだ格言などの言い回しを多く紹介している。福本はこのような表現形式を「俚言」と称しているが、6 - 2節に詳述したとおりの理由で「俚言」は用いず、諺・格言とする。

福本は、諺・格言については、本書の根幹である「伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考」とは別の原稿「伯耆北條地方の俚言採集」をまとめている。これは、本書 pp. 153-170に掲載されている。同稿「ハシガキ」のなかで、これらの表現力に富んだ言い回しには農村の実際の生活を直接に反映した、「妙味アル言葉」が多くあるのだとしている¹⁶⁾。この記述からも、方言記述に際して、日本ルネッサンスを十分に意識していたことがわかる。

地域の地名が出てくるものに次のようなものがある。

[26] 地名の出てくる格言

- ・キヨウ・サカ見エテモ、志津・尾田見エヌ。(註、キヨウ、サカハ京都大阪ノ意。志津・尾田八、倉吉町ヨリ少シ奥地ノ地名ニテ、山間ノ部落)(本書 p. 166「地名俚言」より)
- ・伯耆デ小唄歌フナ、因幡デ小相撲取ルナ、作州デ棒振ルナ。(註、伯耆ノ人ハ小唄歌フノガ上手、因幡ノ人ハ素人ズモウガ上手、作州ノ人ハ劔術ガ上手ダカラトイフノデアラウ。)(本書 p. 166「地名ニ関スル俚言」より)
- ・弓原火事デ田井ヘンダ。(弓原村ト田井村ハ、下北條村のアザデ隣村デアル。タイヘンダハ、大変ダト、田井辺ダトヲヒツカケタ言葉デアル)(本書 p. 167「地名ニ関スル俚言」より)

どの格言も、辺境地域への揶揄または、隣接地域への賞賛や憧憬などを、諧謔をこめて表現されている。その土地とそこで生活する人々の営みとの関連性が感じられるものである。

「伯耆北條地方の俚言採集」の最後の項に「北條地方ノ天候豫測俚言」がある。天候に関する言い回しが同箇所¹⁷⁾に9項目挙げられている。そのうちのいくつかを[27]

に示す。

[27]「北條地方ノ天候豫測俚言」より（本書 pp. 169-170より抜粋）

- ・メメズ（蚯蚓）ガ出テ這ウト天氣が続ク。
- ・夏、浜井戸ノ水ガ枯レルト、冬、大雪ガ降ル。
- ・猫ガアバレルト、アケノ日八大アレガスル。（註、コレハ主トシテ冬季ノコトデ、ヨクアタルト云フ）

これらの記述からは、天候に左右される農事、漁獵などとの関連が窺われ、やはり地域文化の人々の全体的な活動を意識していたということを知ることができる。

7 - 4 「～する」について

新流行語としての「～する」

福本は「百姓スル」という語形に非常に関心を示し、本書本編の「ハシガキ」に、すでに「～する」の語形に関する詳述がある。

[28] ナホ、動詞デハグヅル（愚図ル）、百姓スルナド、ナカナカニ新味ヲ帯ビタモノガアツテ、学者ヲ驚カザズニハオカヌデアラウト思ハレルノハ愉快デアル。科学スルトイフ言葉ハ、近頃ノ新流行語ダガ、我が北條地方ノ百姓ダ（ママ）チハ、昔カラ百姓スルトイフ動詞法ヲ持ツテ井タノダ。尤モ、コレハ、此ノ地方ノ言葉ノ一特色ガ、一般ニ、目的格ノヲ省略スル傾向ニモヨル所ガアルカモ知レヌ。例ヘバ、学校ヲヤメル、本ヲ讀マウ、トイフ場合ニ、ヲ省略シテ、学校ヤメル、本讀マウ、トイフ類デアル。勿論学校ヲヤメル、本ヲ讀マウトモ言ハヌデハナイガ、略スル場合ノ方ガ寧口多イ。ソレハ兎マレ、「百姓スル」トハ、「哲學スル」、「科学スル」ナドト其ノ語法ヲ一ニシテ、シカモ、後者ノ如ク学者ノ考察シタモノデナイ所ガ、注目ニ値ヒスルト思フ。（本編「ハシガキ」p. 2）

福本は、「～する」という語形は「近頃ノ新流行語」であるとみなしている。現在では、「～する」という語形は幅広く許容されているが、1942年当時は正統的でない語形形成、もしくは略語であるとみなされていたようである。その、一種の流行語とみなされていた語形が、北条方言に、幅広く、おそらく古くから広く用いられていたことを、当地方の方言の特色として挙げている。

この「～する」という語形は、1942年当時は、学者や政治家など、知識人の間の流行語であるという認識が強

く、福本自身もやや怪訝に感じているようであるが、その一方で、鳥取県出身の医学者にして元文部大臣橋田邦彦¹⁷⁾が「科学スル」という表現を多用していることは、方言の影響も少なからずあることも示唆している。

[29] 此頃、橋田邦彦博士ハ、「科学スル」トイフコトヲ頻リニ力説サレテ井ルガ、此ノ科学スル博士ヲ出シタ鳥取県。其ノ鳥取県ノ北條地方デハ、ソノ前ニ、

釘ガ腰スル(追補七).....	ヒデアラウ。 釘ガ曲ル。按ズルニ、人 ガ腰ヲ折り曲ゲタ恰好二 曲ガルノ義デアラウ。
タイギスル(追補七).....	ジンギスル、贈物ヲスル (筆者注:「大義スル」 の意味か。)
ワルイヒスル(追補八).....	悪評スル(筆者注:「悪 言いする」の意味か。)
ヒマザイスル(追補八).....	御邪魔スル。按ズルニヒ マザイトハ隙障ノ義カ。
テンテンスル(追補八).....	タタキツケル
マイマイルスル(追補九).....	タベル、メシアガル
ホトホトスル(追補十).....	鶏ガ砂浴スル。

これらの「～スル」の語義と、元々の語構成を考えるに、本来「～をする」であったものから助詞「を」が脱落して形成されたとする福本の考察([28]参照)が当てはまるものは意外と少ない。例えば、[28]の引用中の中心的な語「百姓スル」にしても、助詞「を」を補った「百姓をする」から「百姓の全般の仕事をして農業を生業にする」という意味を形式的に導き出すだけの結びつきを「を」が担っていると考えるのは、いささか難解である。[30]に挙げた語のなかにも、「ガンジョウスル」「二ハスル」「菖蒲スル」など、「を(ヲ)」を補っただけでは意味が取りにくい語彙が多くある。つまり、福本が考えた「ヲ」を省略したとする形態構造、そして、中央(東京)で学者が最近言い始めたと言われる「哲學スル」のような語形とは異なる意味構造の「～スル」が北條地方には存在していたことになる。

このような「～する」という語形成は、福本の時代から現代に至るまでに、何度か問題を提起しながら進化してきたという経緯をもつ。

1970年代から1980年代にかけて、「お正月する」(＝お正月を通例通り祝って過ごす)、「お茶する」(＝喫茶店などで紅茶、コーヒーなどを飲んでくつろぐ)などの語が発生し、ドラマの台詞に使われたりすると「その言い方は変だ」といった苦情が出るといったことが始まった。その後、上記のような「～する」型の語形成は一般性を持つようになり、今では誤用であるという解釈はほとんどない。また別途、「事故る」「だべる(駄弁る)」などの「～る」型の語(「る」ことばと呼ばれることもある)が発生し、こちらは「マクる」(＝マクドナルドの店でハンバーガーを食べる、休憩する)「タピる」(＝タピオカ入りの飲料を飲む、買う)など、現在に至るまで次々

と新しい語を生み出すに至っている。しかしながら、これらのような、中央(東京中心)で、高度経済成長以降に起こった、「～する」や「～る」のような新しい構成の語の出現は、主に若者世代、または、卑俗な日常の中で発展してきたのに対し、福本が指摘した「哲學スル」「科学スル」などは、知識人の言語使用であったことが、大きく異なっている点である。福本は、中央では知識人の性向である言語的特徴を、地方(福本の故郷である鳥取県北条地方)では庶民である農業従事者が伝統的に使ってきた点を重視し、文化的復興、発展への機運は、元々地方の庶民にこそ宿っているということを主張したかったのである。

1942年当時の「～する」という語形に関する中央での新奇性と、地域方言(本稿では鳥取県北条地方)で、むしろほぼ当然のこととして伝統的に使用されている、という非対称性は、中央ではまだ起こっていない、または新しく起こり始めた言語的特徴を、地域方言ではそれに先行してすでに起こるといえることがありうるという、普遍的ともいえる傾向を、福本にとってはほとんど無意識に指摘していたともいえる。

現在、当該地域においても、例えばいわゆる「ら抜きことば」(「食べることができる」の意味で、「食べられる」のかわりに「食べれる」と言う、「ら」が抜ける言い方)「レたすことば」(「読むことができる」の意味で、「読める」の他に「読めれる」も許容する、「れ」が余計に足される言い方)などが、伝統的に許容されてきたことなども指摘できるが、「～する」に関しては、時代的には、それにはるかに先行する指摘であるといえることができる。

7-5 「ホイタ」の語源について

福本は、「ホイタノホイト」(乞食の意味)の語源について、熟考している箇所がある。本編の「ホイタノ語源」と題する原稿に次のようにある。

[31] ホイタノ語源 (p. 14)

乞食ノコトヲ北條地方デハ、ホィタトイフ。ホイタガ、中國地方ノ方言ホィトノ同行転化デアルコトハ容易ニワカルガ、サテワカリカネルノハホイトノ語源デアル。大言海ニモ出テ井ナイガ、筆者按ズルニ、ホイトハ、物ヲ欲ル(ホル)人、又ハ、物ヲ欲リスル人ガ、ホルト、又ハ、ホリトナリ、ソレガ更ニ転ジテ、ホイトナツタノデナイカ。或ハ思フ。ホイトトハ、ホガヒビトノ略語ニテ、正確ニ書クナラバ、ホヒトデハアルマイ乎。昔ハ、ホガヒゴト(寿詞)ヲ人ノ門前ニ述ベテ、物ヲモラヒ歩ク乞食ヲホガヒビトイツタコトガ

辞書二見エテ居ル。シカシテ、垣内（カキウチ）ガ略語法デカイチトナリ、垣外（カキソト、又ハ、カキト）ガ、カイトトナル略語法ガ立派ニアルノダカラ、此ノ筆法ヲ以テスレバ、ホガヒビトカラホヒトノ略語ガ可能デハナイ乎。果シテ然ラバ、方言ホイタノ語モ笑ツタモノデハナイ。ホガヒビトイフ辞書ニアル語ガ、オモシロイ特殊ノ略語法ニヨツテ、出テ来ツ（ママ）タ注目スベキ價値アル略語ダト云ヘヤウ。（下略）

福本は、「ホガヒビト」から「ホイタ（ト）」に略する方策は、「ムツカシイ略語法」（本書 p. 2）と言及し、この種の語形成を「略語」として扱っている。福本の略語、または現在の言語学的視点からみた本書の略語形成についての考察については7 - 6節で別途述べるが、[31]の記述は、略語形成のあり方については、語源探求の面に焦点を当てると、極めて含蓄に富んでいる。

まず、「ホイタ」が、中国地方一円に「ホイト」という同系の語があって、その語群の一例として、幅広い地方で用いられているという事実への言及があることである。福本は、広範囲で用いられている語形であるから、偶発的ではない明確な語源が考えられるはずだと考えている。

また、語源として、「（物ヲ）欲ル人」から「ホルトノホリト」を経て「ホイト」となったという説と、「ホガヒビト¹⁹⁾」から「ホヒト」を経て「ホイト」に至ったとする説を引き合いに出し、両者の可能性を対等に扱っている。本編中、用語集ではなく、いくつかの語について、詳しい記述の原稿があり、「ホイタノ語源」の他に、「スクモ・モク切り其他」（スクモ：稲の籾殻、モク切り：川の流れをよくすること）、「ゴロクト其他」（ゴロクト：フクロウ）、「デンデンmamシ其他」（デンデンmamシ：カタツムリ）など、主に動植物の名前を中心にした記述がみられる。方言形に対する意味的な解釈を、語源に求めたことは、柳田國男の影響を受けた結果であり（特に「デンデンmamシ」などは柳田（1930）の直接的な影響を感じさせる）、この点においては、福本の極めて真摯な方言への探究心を感じさせる。ただ、残念ながら、7 - 6節にまとめている、純粋な意味での音韻的な略語、音韻の省略と、語源追求を非専門的に関連付けてしまっている所に、やや稚拙さを感じざるをえない。

7 - 6 「略語」について

福本の「略語」への注目

福本の「略語」への注目は、原稿の題目が『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』となっており、方言、訛り

といった、典型的な地域方言の言語的特徴とはいえない「略語」という語が、分析の主要な項目として題目に列挙されていることから、福本にとっては、格段の興味と重要性を感じていたのではないかと推察される。本節では、福本の注目した方言的な意味での略語を取り上げて、現代の言語学的視点から再考察する。

本編「ハシガキ」に次のような一節がある。

[32] 略語法二八、チマキ(粽)ノ頭ヲ略シテマキト云ヒ、オシャベリノ尻尾ヲ切捨テテ、オシャベト云フガ如キ面白イ略語法ノ外、ホガヒビトヲ略シテホイト云フガ如キ、ムツカシイ略語法モアル。(p. 2)

福本は、略語を、形態論的または意味論的な単位を基準にとらえることと、純粋に音韻的にとらえることを、かなり曖昧にひとくくりにしてしまっている。しかも、「（チ）マキ」は語頭音の削除、「オシャベ（リ）」は語末音の削除という観察はいいとして、「ホイト」<「ホガヒビト」のような、略語と認めるには、音の脱落の他に隣接する音韻の交替や融合といった別の様々な要因を考慮しなければならない点が欠落している。しかも、この一節に続く段落に、音韻添加（「ん」や「っ」の添加）に関する記述があって、略語法の一つとみなしている節がある。音添加に関しては、筆者は「略語」とは別の考察として、次節（7 - 7節）で別途扱う。

本書中、本編、追補其ノ一～其ノ十のすべてに略語に関する記述があり、追補には「訛言・略語其他」「訛言・略語」といった項目があり、それらの項目を総計すると116項目になる。単独の語類としては最も大部であると思われるが、前述のとおり、音韻的な省略の他に、音が隣接して融合し、結果として語が短くなっているものや（例：アギョウカ<あげようか）、「ん」や「っ」などの添加を伴うもの（例：ボンサン<坊（ぼー）さん）も一律「略語其他」としてまとめられていたり、語彙の項目が、音韻的または意味的など、何かの基準に基づいているとは考えられないほどに無造作に羅列されているという印象がある。そのため、略語の特徴を言語学的に分析するためには、福本の分類は、かなり大幅に見なおす必要がある。

ともかくも、福本が音の省略を方言的な特徴として挙げていることは意味あることと考えていい。以下で、省略される位置による分類、省略される音韻による分類、に分けて、福本の分類した「略語」について考察する。略語でないものについては にまとめる。

省略される位置による分類

本書中、「(チ)マキ」のような、語頭部分の省略を起こす例として、次のようなものを挙げるができる。

[33] 語頭部分の省略があるもの(抜粋。語釈は本書に基づき筆者が一部修正。以下、原文の促音、拗音に含まれる文字は現代表記に従い小文字「ッ」「ャ」「ユ」「ヨ」を用いる。長音表記「ー」も使用する(例:カイイ カイー と表記する))

- (チ)マキ(本編) 粽
- (ヒ)サーシー²⁰⁾(追補一) 久しい
- (イ)エ(追補一) 家(「アノエ」「あの家」)
- (イ)カッサマ(追補四) いかさま(如何様) 転じて、「びっくりだ」「驚いた」という感嘆を示す叫び。

(イ)ヤーシー(追補九)卑しい

これらの語に見られる特徴は、省略されるのは1音節でしかも[33]の例の限りではすべて母音は/i/である。高母音/i/は、きこえが小さいので、アクセントのない語頭などで省略されることが多い。例えば、現代標準語やその他の地域方言で、「いばら(茨)」が「ばら」となる場合があるのは、この種の理由による音韻交替である。現代標準語・中央語では、語頭の省略による略語はそれほど多くないことが知られているが²¹⁾、それゆえ、[33]のような略語は、当北条方言の主要な特徴と考えるとよい。

一方、語末の音が省略されるものには、以下のようなものがある。

[34] 語末部分の省略があるもの(抜粋。語釈は本書に基づき筆者が一部修正)

- オシャベ(リ)(本編) お喋り(な人)
- ナ(ニ)シテ(本編) <何して。どうして
- ハシ(カ)カイー(本編) 「ハシカ」は麦ののぎ(芒)で、「芒がくっついて痒い」の意味。

[34]のような略語は、本書中に多く挙げられているが、現代標準語・中央語を含めての略語法としては卑近に見られるものであり²²⁾、特に当該方言を特徴づけているとは考えられない。

省略される音韻による分類

次に、省略される音韻について、音韻に着目して略語形成を考える。撥音「ん」の脱落[35]、長音「ー」の

脱落[36]の例を示す。

[35] 撥音「ん」の脱落したもの(抜粋。語釈は本書に基づき筆者が一部修正)

- ダイコ(ン)(本編) 大根
- ゲンカ(ン)(追補一) 玄関
- アンド(ン)(追補六) 行灯
- ニンゲ(ン)(追補六) 人間

[36] 長音「ー」の脱落したもの(抜粋。語釈は本書に基づき筆者が一部修正)

- テゴ(ー)(追補一) <手合。手伝いの意味。
- ホイチョ(ー)(追補一) 庖丁
- ポーフ(ー)(追補一) <防風。砂丘の植物の意味。

これらのうち、注目すべきは、[35]の諸例である。現代日本語(標準語)では、略語形成の際に特殊拍が積極的に脱落するが、特殊拍の長音、促音、撥音のうち、もっとも安定しているのは撥音であり、撥音が単独で脱落することは多くないといわれている(桑本 2002)。一方、[36]のような長音の脱落は、例えば俳句や和歌、川柳などの五七五(七七)音への対応や、野球の応援などの字余り、字足らずの補正のために、多くみられる現象である(田中 2008)。以上、現代標準語との対照によれば、撥音の脱落は、北条方言を特徴づける音韻現象としてよい。

「略語」とみなせないもの

[37]のような子音の脱落は、語の一部が略された、いわゆる「略語」とみなすよりは、音韻的な条件による音韻脱落と考えるほうが普通である。

[37] 音韻脱落の例

- イナフ(追補一) <(n)ɲau(担う)/n/の脱落
- マエル(追補一) <ma(ɹ)ɛru(混ぜる)/z/の脱落
- イナミ(追補二) <(m)ɲami(南)/m/の脱落
- ナーシロ(追補四) <na(ɹ)w)asiro(苗代)/w/の脱落
- ダイー(追補七) <da(ɹ)ji(<darui)/r/の脱落

なお、脱落する子音として、鼻音、流音、半母音などの共鳴音が多いのは、当該方言の音韻上の特徴の一つとみなせる。

7-7 音添加について

音添加については、撥音「ん」の添加が最も目立つ。

8 - 5 「ドンドロケ」

「ドンドロケ」(雷)に関しては、本書中複数にわたって記載され、または、記載の準備がなされていて(章立てのみで記述のない箇所が散見される)よほどの憧憬があったものと推察される。「追補其ノ五」に次のようにある。

[49] ドンドロケ……雷。按ズルニ、カミナリノ物スゴク鳴ル時ノ音ヲウツシタ語デアラウ。独乙語デ、ドンナー(Donner)トイフノト、一寸、似テ井ルデハ無イ乎。(()は筆者)

他にも、「追補其ノ一」の表紙の書き込みに

[50] ドンドロケ(雷)…ドイツ語 ドンナー(名詞)
ドンネルン(動詞)

とあり、ドイツ語の名詞形 Donner(雷)さらに動詞形 donnern(雷が鳴る、大きな音をとどろかせる)までわざわざ書き付けて、関連させようとしている。音象徴(sound symbolism)は、言語の普遍性に対しては、主要な事項になりうるが、北条方言とドイツ語の類似性を直接的に関連づけてしまったのは、やや誇張しすぎであった。

8 - 6 「ハシカ」について

7 - 6 [34]で例示した「ハシカイ」について、元々「ハシカ - カイ」からの略語で、「ハシカ」は「麦の芒(のぎ)」のことで、「麥ノ芒ナドニ觸レテ感ズルカユサノ形容詞。」という説明はよかったが、「本編」p. 7の「註」にこのように書かれている。

[51] …又、麻疹ヲ一名ハシカト云フモ、ハシカイ病氣ダカラデアラウ。(「本編」註。p. 7)

病気の「はしか」は方言ではなく標準語・中央語であるので、麦の芒を表す北条方言の「ハシカ」が関連しているとは考えられない。これなども、福本の思い違いであろう。

8 - 7 まとめ

このように、福本はいくつかの点において、思い違いや思考を過度に及ばせたために、後の世の標準的な言語学的見地からは誤解としか考えられないような過失を侵している。しかしながら、それらの論考に関して十分の

反論できるだけの根拠が示されないこと、1942年当時の正統的な言語学、日本語学、方言学が発展期を迎えるはるか以前であったこと、研究上の助言者の柳田國男が生粋の民俗学者であり、文化や風俗の観点から言語現象をとらえていたことなどから、これらの記述は致し方ないと思われる。したがって、本節で指摘した点のみによって、福本を愚弄すべきではない。

9 . おわりに

以上、福本和夫の手による原稿『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』(1942年記、他数点、鳥取県立博物館所蔵)および活字化された出版物『福本和夫稿 伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』(2012年、鳥取県北栄町教育委員会編著)について、執筆の経緯、意図などを明らかにしながら、執筆当時の社会的、学術的時代背景などにも思考を波及させつつ、元原稿ならびに本書の、福本の研究活動における位置づけ、および、現在にもたらず学術的意義などについて思うところを論じた。

とりわけ驚くべきことは、福本の方言に関する洞察力と、現在の言語学研究、方言学研究にも通じる正確な事実認識である。しかも、福本は、後に集大成としてまとめ上げる「日本ルネッサンス史論」との関わりのなかで、自らの母方言である鳥取県北条方言を鋭く観察し、考察し、本書をまとめ上げたのであるが、実際のところ、福本は言語学に対しては専門的に取り組んだわけではなく、また、当の言語学、方言学も、近代の学術発展のなかでは、緒に着いたばかりの時期であった。また、地域方言の社会的地位、学術的な対象としては確固たるものとはみなされない時代である。このような時代背景の中で執筆され、しかも後の学術的知見に通ずるものを多く書き記している点で、珠玉の稿といっても過言ではない。特に、多くの音韻に関する記述は特筆すべきである。

本書は、2012年に、北栄町教育委員会から編集執筆がなされた以降を以てしても、本質的な評価をされないままであった。筆者は本稿において、本書を言語学、方言学の現在の学術的見地から検証し、全体的に一応の評価を下したつもりである。至らない点については御批評をいただくとして、当面のところ、本稿が福本和夫研究、また、北条地方方言研究の一助となれば、まさしく幸甚の至りである。

謝辞

本稿は、鳥取県北栄町図書館主催令和元年度第1回郷土史入門講座「福本和夫と北栄町の方言 『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』を読み解く」(2019年9月21

日、北栄町図書館)に基づき、加筆、修正を施し、まとめたものである。本稿を執筆するにあたり、筆者を当講座の講師としてお招きいただいた妻由静代北栄町図書館長、福本原稿所蔵の鳥取県立博物館学芸員三浦努氏、尾崎信一郎氏、ならびに、取材協力していただいた福本和夫御子孫の福本晃氏(福本の甥)、福本英樹氏(福本の大甥)には非常にお世話になった。記して感謝申し上げる。

注

- 1) 本書 p. 3: カネテ多年念願ノ柳田國男先生ニ、愈々近々、オ目ニカカリ得ルハコピニナツタノデ、親シク先生ノ御検討ヲ仰ギ度イト期シテ井ル次第デアル。
- 2) 本書 p. 31: ソレヲ書キ上ゲテ間モナク筆者八十七年ブリニ販省シタ。...(中略)...販ツタソノ日カラ、家人ヤ村人ノ談話中カラ手帖ニ書キ取ツタ訛言・方言・略語、新ニオヨソニ百語ヲ整理シタノガ、此ノ追補一篇デアル。
- 3) 1907年(明治40年)中北條尋常高等小学校による「方言調査表」(本書三ページ)
- 4) 25年前というのは、仮に『新修北条町史』発行の2005年を起点とすると1980年頃ということになるが、福本の没後(1983年以降)に、遺品整理の一環で原稿が寄贈されたと推察するのが妥当であろう。
- 5) いわゆる「獄中メモ類」を基にまとめられた最初の刊行書は『日本近世の文化革命 日本近世学芸復興期論序説』(潮流社、1949年)である(高野2015:9f.)
- 6) しかしながら、福本の方言に関する論考は、『福本和夫著作集』(全10巻、2008-2011、こぶし書房)に収められたものの中では、『私の辞書論』(1977年、河出書房)の「方言の語源」(福本2011、427-428)という短い節で記述されているのが唯一である。なお、本文中、「目高雑考」という原稿が付加されているが(本書 pp. 172-173)、「方言の語源」の記述は「目高雑考」稿を踏襲したものであると認められる。
- 7) 福井(2011:3): 方言についての論考はこの(日本ルネッサンスの)延長線上にある。
- 8) ウィキペディア「上田萬年」には「博語学」とあるが、正しくは「博言学」。なお、東京帝国大学博言学講座は1899年に言語学講座と改称。
- 9) 1994年発売のヒップホップ「DA.YO.NE」(EAST END x YURI)の影響を受け、1995年に「DA.YO.NE」の歌詞を各地の方言に直したものが流行した。SO.YA.NA(大阪弁) DA.BE.SA(北海道弁) DA.CHA.NE(東北弁)などが知られている(ウィキペディア「DA.YO.NE」)。
- 10) 2019年8月21日、鳥取県立博物館にて閲覧。
- 11) 鳥取県立博物館所蔵の福本原稿のうち、本書に掲載がないのは、フクロウなど数点の絵と、「第一篇千刃稲扱の発明」と題する原稿の断片(原稿用紙1枚分)のみである。
- 12) 本書 p. 179: 筆者ノ郷里ガ耕作ニ専ラ牛ヲ使用シテ馬ハ殆ド見ラレナイ地方デアツタセイカモシレヌト思ツテ井ル。
- 13) 本書 p. 187: 今、全國デ本登録ノ牛ガ六十余頭、ソノ中三分ノ一ハ因伯牛ノ占ムル所ダト云フ。
- 14) 元原稿中に、柳田國男による直筆のコメントあり(本書 p. 86): 新亡ナリ 古語
- 15) 元原稿中に、柳田國男による直筆のコメントあり(本書 p. 97、写真1も参照のこと): 見立テ、送別ナラム
- 16) 本書 p. 153: ...此ノ部類(俚言)ニ却ツテ、妙味アル言葉 農村ノ實際生活ヲ直接ニ反映シタ言葉ノ沢山ニアル事デアル。()は筆者)
- 17) 橋田邦彦: 1882-1945 鳥取市出身。医学者、教育者として知られる。1940年第2次近衛内閣および1941年東條内閣の文部大臣を歴任。「科学する心」を推奨。学校教育での自然観察を推進し、戦後の科学教育に影響を与えた。(ウィキペディア「橋田邦彦」)
- 18) 「パンパンニスル」(追補九)は、助詞を伴っているため除外した。
- 19) 広辞苑第七版(2018)「ほがいびと」: 人の門戸に立ち寿言(ほがいごと)を唱えて回る芸人。物もらい。乞食。
- 20) 該当箇所(p. 46)に、「例、「サアシ振リニ」久シ振リニノ謂ヒデアル」とあるが、現在でも当該地域で用いられる方言形である。
- 21) 米川(2009:127, 188)は、前部が略される略語は元の語がわかりにくくなるので隠語性が高まるため、通常語彙には少なく、香具師や暴力団など反社会集団の語に多くみられるとしている(例: サツ(<警察)、ダチ(<友達))。
- 22) たとえば、「テレビ(ジョン)」「パンフ(レット)」などの単純語、「ワー(ド)プロ(セッター)」「ファミ(リー)レス(トラン)」などの複合語で、この原則に従った略語形成は豊富にみられる。
- 23) 「こーっさん」(校長さん)という略語もかつて存在した(約40年前の倉吉市内。筆者の経験より)。
- 24) 平山・室山(1998:14)は「ニーナー」(蜷)、「キンギョー」(金魚)などの長音化が、因幡地方を中心

にみられるとしている。また、「ふた一つ」(二つ)などが、強調ではなく通常の語調として聞かれる(倉吉市内、筆者の経験)。

25) 方言内でのゆれとして「イダキー /idaki /」～「ヨダキー /jodaki /」(うるさい、汚い)も指摘されている(本書「追補其ノ四」p. 76)。

26) 現在(2019年) NPO 法人未来(鳥取県倉吉市)の運営する情報誌「te te te」がある。「te te te」は「ててて」と読み、「連れててて。」の意味の方言であるが、福本の時代から70年以上経過してなお、方言形の音韻が情報誌のタイトルとして親しまれている。

27) 元原稿中の柳田國男のコメントによる(本書 p. 95) α B) N G] 3zP

%•0 φ P' "ž ^ Ö2R=ÿ=e

% \$

参考文献

TM% U - a

福井眞佐汎(2011)「福本和夫『伯耆北條地方ノ訛言・方言・略語考』について」『北栄文芸』第23号, 3-4, 鳥取県北栄町: 北栄町中央公民館。

福本和夫(1967)『日本ルネッサンス史論』横浜市: 東西書房。

福本和夫(2011)「私の辞書論」『福本和夫著作集 第八巻』223-440, 東京: こぶし書房。[1977年, 河出書房新社刊の再掲]

平山輝男・室山敏明(1998)『日本のことばシリーズ31 鳥取県のことば』東京: 明治書院。

北條町誌編纂委員会編(1974)『北條町誌』鳥取県北条町: 北條町誌編纂委員会。

北栄町図書館「福本和夫稿「伯耆北條地方の訛言・方言・略語考」の販売について」(<http://www.e-hokuei.net/2755.htm>) (2019年10月30日閲覧)

井上史雄(1993)「価値の高い方言/低い方言」『言語』第22巻第9号, 20-27, 東京: 大修館書店。

イヴィッチ, ミルカ(1974)『言語学の流れ』早田輝洋・井上史雄共訳, 東京: みすず書房。[translated from Ivič, Milka (1965), the Hague: Mouton & Co.]

石見尚(2016)「特別寄稿 故福本和夫先生、故郷へ帰る」『北栄文芸』第41号, 1-3, 鳥取県北栄町: 北栄町中央公民館。

小島亮(2005)『福本和夫の思想 研究論文集成』東京: こぶし書房。

桑本裕二(2002)「日本語におけるモーラの鼻音の特徴」『東北大学言語学論集』93-104。

桑本裕二(2018)「鳥取県倉吉方言におけるア段長音の派生と分布について」『東北大学言語学論集』第27号, 19-29。

森下喜一(1999)『鳥取県方言辞典』鳥取市: 富士書店。
森田武(1977)「7音韻の変遷」『岩波講座日本語5 音韻』253-280, 東京: 岩波書店。

室山敏昭(1982)「鳥取県の方言」飯豊毅一・日野資純・

Ð™Æ ð -@7 -Ð°@T

@b S Z P>PÂ@Ù0P